

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成28年度

京都外国語大学

## はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、平成 29 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	滝井 未来
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第15号
学位授与の日付	平成29年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	ことばの学びとビリーフ変容 ータイ人留学生の学習意欲に関する質的研究ー
論文審査委員	主査 教授 由井 紀久子 副査 教授 中川 良雄 副査 教授 青木 直子（大阪大学）

## 論文内容の要旨

勉学態度も良いのに、日本語学習に躓く学習者に教師は気づくことがある。要因として様々なことが想定できるが、実はどのようなことなのかは推察しかできないことが多い。本博士論文は、筆者がタイで日本語を教えた経験と日本国内でタイ人学生に高い割合で生じる学習への躓きに対する注目から始まった研究である。

博士論文は、来日した留学生が新しい環境下で、日本語の学びをどのように位置づけ、困難をどのように克服していくのかという点について、学習者ビリーフと学習意欲の関係から考察している。特に、タイ人留学生に焦点を当て、その語りから解明を試みている。

序章では、日本語教育を取り巻く教育的背景について述べている。1980年代半ばのコミュニカティブ・アプローチを中心としたコミュニケーション能力重視への考え方の転換、あるいは、1990年代半ばの自律学習・協働学習といった社会的成員としての学習者を重視する考え方への変換にもかかわらず、多くの現場では、文型・文法事項の習得に目標設定されたカリキュラムのもと、今も疑似コミュニケーション活動が行われているという問題点を指摘している。続いて、タイにおける日本語教育を概観している。

第1章は、学習者ビリーフに関する先行研究のレビューである。研究の嚆矢となったHorwitzやWendenの研究を説明し、1990年以降のビリーフ研究を紹介している。次に、日本語教育におけるビリーフ研究を方法論の観点から概観し、量的研究の成果と問題点を述べている。問題点は、科学的に実証されたとするデータや研究を固定的、本質的に捉えていることである。最後に、タイ人の持つ教育観及び教師像について、タイ人の持つビリーフの観点から検討している。

第2章は、まず、動機づけ・学習意欲に関する研究を取り上げている。Gardner & Lambertによる社会的・心理的な立場からの動機づけ研究について説明し、自己決定理論を提唱したRyan & Deciの研究、特に、内発的動機づけと外発的動機づけについて、それぞれが独立し、相対するものとする考え方から動機づけは連続したプロセスであり、外発的動機づけであっても自己決定的になる場合もあるとする立場を紹介している。次に、学習ストラテジーに関する研究として、Wendenの定義を示したうえで、

Oxford(1990)の分類を提示している。さらに、日本語教育における学習ストラテジー研究について、板井(2001, 2003)と呉(2007)のビリーフとの関係の調査研究を紹介している。

第3章では、本研究の位置づけと題し、まず、研究の視点として、文化研究における「個(セルフ)」という観点からの洞察の必要性を認めつつ、日本語教育現場においては「個人=学習者」であるが、若年層が多く、自らの生きる一定の外延を持った何らかの「社会」によって、その存在を本質的に規定されていることに注目し、集団的な観点も肯定し、さらに、日本語の「学び」については、西口(2013)の「現在の日本語教育の方法と日本語教育学の視点を俯瞰的に見ると、ソシユール以来の言語観とそこから演繹される言語事項中心の言語習得観が通底しており、そのパラダイムからは解放されていない」という指摘に同調し、問題意識を提示している。留学生に必要とされている教育について、彼らの視点から日本語がいかに学ばれ、どのように感じ、どのようなことに問題を感じるかということを検討すべきとしている。そして、次の3つのリサーチ・クエスチョンを立てた。(1) 日本に来てからタイ人留学生たちは、教室の内外でどのような経験をし、何を感じ、そこにビリーフはどのように影響しうるのだろうか。(2) どのような具体的要因で学習意欲が減退していくのであろうか。(3) 個人が生きる社会との関わりや経験の中で、ビリーフはどのように影響を受け、変容の過程を辿り、また彼らにとって必要な「日本語の学び」とはいかなるものであろうか。これら3つの問題を解明するには、質的研究法が適しているとし、グレッグ(2007)の質的研究のタイプの概略図を示し、中でも、グラウンデッド・セオリーが適していると述べている。

第4章は「学習意欲と言語学習ビリーフービリーフの影響と意欲変化のプロセス」で、研究方法として、先に示したグラウンデッド・セオリー・アプローチを詳述し、さらに、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴と分析方法を紹介している。続いて、調査方法及び調査協力者について説明し、インタビュー調査の結果を分析し、概念図で示している。時間の経過の軸と学習意欲の高低の軸を立て、【一生懸命すれば大丈夫】【異文化との関わり】【一見順調】【学習上のハードル】【順調じゃない】【元気になってきた!】【タイでの第二言語学習】【学習姿勢「まじめ」】【教師とは】等のカテゴリーを抽出し、関係づけを行っている。そして、【新たなビリーフ】として「自立心の芽生え」と「教科書で勉強しないこともある」を提示し、概念図にあるカテゴリーの生成過程を調査協力者の発言例を示しながら述べ、概念図のより詳しい説明を行っている。リサーチ・クエスチョン(1)(2)に対して、タイ人留学生14名のビリーフと学習意欲の変化のプロセスをたどった結果、最も困難に感じることは、漢字学習と会話及び聴解であり、まじめに取り組む姿勢を持っていないながらも<学習とは先生が教えてくれること>と信じて学習に臨み、しっかり指導をしてもらっていない大量の漢字に圧倒され、話し方も教えてもらっていないのに、授業内で発言を求められることにプレッシャーを感じていることが明確になった。また、中級レベルでは、学習形態が大きく変化するが、目にする語彙や文章には漢字の数が急激に増え、教室内での教師やクラスメートの発話量が増えるこの時期に、彼らは心理面で大きな負担を感じ、目の間に起こっている状況にうまく対応できない事態が生じる。そしてこれを放置することで学習意欲の低下が起こるということを明らかにしている。教師の早めのケア、対策の必要性を強調し、教師の意識の向上を訴えている。

第5章は「ビリーフ変容過程と社会との関わりの中での学びの位置づけ」と題し、リサーチ・クエスチョン(3)の解明を目指す。研究方法としては、ライフストーリー研究を採用するが、その理由と特徴を述べ、特に、桜井(2002)の主張する「対話構築主義アプローチ」の立場に立つことを説明している。ライフストーリー研究における分析方法は確立されていないが、「留学生それぞれの持つビリーフが学習経験や社会との関わりの中でどのように変容していくか」「その過程において、留学生はどのような日本語を必要とし、日本語の学びをどのように位置づけていくのか」を着目点として挙げている。インタビューは学習が順調に進まなかった2名と、順調だった1名の計3名に対して行われた。3名と

も「学習には一生懸命取り組む」「文法学習が大切である」というビリーフを持っていた。しかし、その理由は異なっていた。順調でなかった2名は、それぞれ「学校教育は文法知識を教えてもらう場所で、コミュニケーション能力育成のためには自身による別の働きかけが必要である」「漠然と文法学習が大切である」と思っており、その先にコミュニケーション能力は習得できると捉えていた」が、途中で挫折したり、自身で掴み取ろうとする努力や意思が必要であることを学んだりした。それでも、教室内での日本語発話量と漢字の数の急激な増加に苦しみ、挫折した。一方、順調だった人は、「なぜ文法学習が大切か」という自身の強い考えを持っており、その背景には「日本語を流暢に話せるようになりたい」という明確な目標があり、この目標を中心に彼はいつも行動していた。前の2名は、日本の生活の中での学びと捉えていたのは、当初は「日本語の構造的・文法的な知識の習得」のみであったが、日本での経験を通じ、様々な社会との関わりで、コミュニケーション・スキルの向上、人間関係の大切さ、授業内の雑談等が無駄ではないことに気づき、学びへと位置づけるようになる。3名合わせた円滑な学びの形成は、「コミュニケーションの学び」と「日本語の学び」の両方が必要であることが分かった。また、ビリーフが変容するのは、困難の克服過程であることも分かった。さらに、タイ人留学生の学習意欲変動として、富吉(2014)のタイ人大学生の日本語学習意欲に与える要因分析の研究を紹介し、「勉強したのに分からない時」を重要な意欲変動の要因の一つであることから、データの3名のうち、意欲低下は「挫折感」や「劣等感」の局面に属したからで、意欲向上は「自己効力感の不足」や「自己の能力への不満足感」の局面に属したからとしている。この後、コミュニケーション教育再考を論じ、社会との関わり、「教室」というコミュニティの在り方、「対話」を通じた学び、「考える力」を養う学びについて、提言を行って、今後の課題へとつないでいる。

## 口述試問及び審査結果

口述試問においては、概念図の説明、特に、カテゴリーの名づけについて質問された。カテゴリー名には形式上の検討が十分述べられていないものがあり、また、カテゴリー名とビリーフが一部混用されていると思われるところもあることが指摘された。研究方法について、特に質的研究の決定に至る過程において理由付けの詰めが甘い点、PAC分析等、他の研究方法を検討した結果の記述が不十分であること、さらに、分析シートを使わない点も指摘された。データについては、環境からくる特殊性があり、ビリーフの変容を一般化して捉えることに無理があるのではないかという疑念が提示された。また、進級できたかできなかったかは、詳細な分析結果より、単に個人の信念がしっかりしていたという他の説明による可能性についても問題が提示された。これらについては、部分的に自らの分析結果の優位性を説明できたが、精査の不十分さも認めていた。先行研究の網羅性、レビューの不十分さ、最新の研究への接近が不十分であることも指摘された。これらについては、率直に認めて再度研究することが述べられた。また、MGTAとLSのパラダイムが違うことが指摘され、同一論文に並べることへの疑問が提示された。また、理論的飽和の説明を求められたり、日本語教育への提言とビリーフ変化に関する研究部分との関係性・連続性の弱さが指摘されたりしたが、これらについての応答は完全とはいえないが、自説は確認できるものであった。

論文全体は、まじめに学習しているにも関わらず、成績が伸びない日本語学習者のサンプルとしてタイ人学生に絞ってデータ収集した点は十分理解できるが、他国の学生との比較がない点が、弱点とも言える。しかしながら、インタビュー調査により、個々の学生の文脈をたどり、どのようにビリーフが変容していくかを丁寧に導き出している点は高く評価できる。質的研究の強みは十分に伝えられていると考えられる。調査人数が少ないため、他の学習者への適用はまだできないかもしれないが、今後も同様の研究を続けるということで、この問題は解決の方向に向かっていくと考えられる。M-GTAで作成した

概念図は、丹念に作られてはいるが、一部、検討の余地が残されている点も見受けられた。しかし、本研究におけるリサーチ・クエスチョンを解明するツールとして、一定以上の役割を果たせるものであり、研究者としてスタート地点に立つことができるレベルであると判断できる。博士論文として先行研究の最新情報を含んだ網羅性、把握の不十分さについては、申請者も認識できており、近いうちに改善が見込まれるものである。英文文献も使い、理論面をしっかりと学んでいた点は評価できる。この他、質問やコメントに対して、自らの主張が弱い、または不十分なところもあったが、おおむね研究内容を伝え、説得できていた。

以上のことから、本博士学位請求論文は合格の水準に達していると判断でき、博士号の学位を授与するに値すると考えられる。

以上